

第8回 寺町饅頭屋

上方落語『口入屋』

本シリーズ第1回の「安元の大火の火元」(樋口富小路、今の鉄屋町万寿寺)から、万寿寺通を東へたどると、町名看板「萬壽寺通寺町西入西橋詰町」①があります。このあたりは、仏壇仏具商の多いところ。この看板も、その一軒西村萬佛堂の二階に貼ってあります。



萬壽寺通 寺町西入 西橋詰町 ①

この看板は、「西入」と送りがな「ル」が送ってあるところがめずらしい。仁丹の町名看板の慣用では、通常、東西は「西入」と「東入」と送りがなはありません。一方、南北は「上ル」と「下ル」と送りがな「ル」が送ってあるのが普通です。

寺町万寿寺といえは、上方落語『口入屋』。口入屋(いまでいう派遣業)から紹介されてきた別嬪の女こしの生まれが「寺町の



仁丹町名看板の所在(寺町の高辻から五条まで)

万寿寺」というのを聞き違えて、「寺町の饅頭屋」と間違えるところがあります。地名の「まんじゅじ」は、「まんじゅじ」ということもあるのを、語呂合わせに利用しています。「京女は色白で美人」ということ、ただそれだけのために、「寺町の万寿寺」を引き合いにだしているの、「なんだ、それだけ」とお思いになるのはごもっとも。ただ、別嬪の女こしが立て板に水と、自分の芸ことをまくし立てるところが面白い。

口入屋から紹介された女こしに、御寮さんが、「お針はどつえ」と聞きますと、女こし「単もん、袷を一通り。綿入れ、襦袢、振

袖、留袖、小袖に、十二単、花魁・太夫の装束も縫ったことがございませぬ。男しの紋付羽織、袴はもちろんのこと、旅装束の手甲脚絆、足袋に草履。そのほか針で縫えるものならば何でも。女ごし「もしも、お子達が習いことをなさるなら」と畳みかけて、「書は定家流、仮名は菊川流。絵も四条流を少々。和歌は二条流、俳諧の付句も見苦しくない程度にはいたします。謡曲は観世流、蹴鞠は飛鳥井流、雅楽の笙を少々。浄瑠璃の語りには太棹、平家琵琶。お琴、三味線、笛、太鼓。文楽・歌舞伎は、油虫、踊りは井上流。盆画、盆石、お香。お手前は、裏千家、煎茶もいたします。花は池坊、作法は小笠原流。剣術は武蔵の二刀流、柔術は渋谷川流、槍は宝蔵院流、水泳は、古式泳法を少々。馬は大坪流、軍学は山鹿流、陣太鼓も打ちならします。忍術は伊賀流、鉄砲は稲富流、大筒は、関流。」などと滔々と。御寮さん「そんな子にいてもろたら安心や。ところで生まれは」。女ごし「京都の寺町万寿寺で」。御寮さん「京都のまんなか、さすがは京女。別嬪さんの多いとこや」。これを、男どもは「寺町の饅頭屋」と聞き間違えます。あとは、男どものだたばたと艶笑はなしで済みませぬ。

別嬪の女ごしの生まれた寺町万寿寺にゆきついたら、平安京の樋口小路はおしまい。寺町通は平安京の東京極大路です。ここでおしまいのはずですが、平成の京都になっていきますので、様子が変わっています。万寿寺通は、南北の寺町通と、それから斜めに走っている河原町とここで交差し、向かい側はビルがびっしりで、ちよつと見ではここで途切れているように見えます。しかし、生活道路の万寿寺通はここではおわりませぬ。河原町通の信号を

わたつて、よく見るとビルの間に細い路地があります。この路地を通り抜けると、高瀬川にでます。ここにかかっているのが、万寿寺橋。さすがに、木屋町に突き当たったところで、鴨川右岸の万寿寺通はおわりです。

五条二位京極第

もとの寺町万寿寺に戻つて、寺町を北上することにしませぬ。途中に、「鳥井金網工芸」(寺町通松原下ル植松町)。豆腐すくい、茶漉しなどの細工。さらに北上、寺町松原の十字路の西南のかどに寺町松原郵便局。この十字路を過ぎたところ、西側の電柱と配電盤の間の壁(といつても柱)に、町名看板「寺町通松原上ル京極町」②が貼つてあります。



寺町通 松原上ル 京極町 ②

東は東京極大路(今の寺町通)、西は富小路(今の麩屋町通)、南は五条大路(今の松原通)、北は高辻小路(今の高辻通)に囲まれた区域は、平安京の坊条でいえば、左京五条四坊十三町。五条三位 藤原俊成の屋敷(五条京極第)は、ここにあつたといわれています。俊成の子の定家は、五条京極第に同居しており、そ

の日記『明月記』建久三年（一一九二年）三月十四日の条によれば、治承四年（一一八〇）の火災で焼失し、そのあと建久三年（一一九二年）までには再建し戻っています。ただし、一一八〇～一九九二の間のいつ五条京極第に戻ったかははっきりしないのが悩ましい。本シリーズ第5回に、平忠度が訪ねた俊成の屋敷は、俊成社ある俊成町（烏丸松原）のあたりであるとしてお話しました。これは、俊成の仮住まいがそこにあつたと仮定しての話です。しかし、平家が都落ちした年は、一一八三年（寿永二年）のことなので、再建がなつた五条京極第である可能性もあり、たいへんに判断がむずかしい。

『平家物語』の異本『長門本』巻第十四には、はっきりと「俊成卿の五条京極の宿所の前にひかへ」と書いてあり、これに従えば、平忠度が訪ねた俊成の屋敷は五条京極第であることになりま

す。第5回に相当するところを引用してみましよう。

其頃皇太后宮大夫俊成卿、勅を奉て千載集を撰れけり。忠度乗かへ四五騎がほど相具して四つかの辺より帰て、彼俊成卿の五条京極の宿所の前にひかへて、門をたたかせければ、内より「いかなる人ぞ」と問へば、「薩摩守忠度」と名乗りければ、落人にこそと聞きて、世のつつましさに、返事もせられず、門も明ざりければ、其時忠度「別の事にては候はず、此程百首をつらねて候を、見参に入らずして外土へ罷り出ん事の口惜さに、持て参りて候。何かくるしく候べき。立ながら見参に入候はばや」といひたりければ、三位哀と思して、わななくわ

ななく出合給へり。

『平家物語』長門本』巻第十四、傍点と振りがなは筆者

〔黒川真道、堀田璋左右、古内三千代校訂、国書刊行会、一九〇六〕

日本文学電子図書館 <http://www.j-texts.com/>より引用

この文のあと、第5回で引用した「さざ波や」のほかに、さらに次の一首、合計二首を千載集に採つたと述べています。

題しらず

読人しらず

いかにせんみかきが原につむ芹の

ねのみなけども知る人のなき

千載和歌集巻第十一・恋歌一・六六八

『平家物語長門本』の作者は、一首の和歌を引用したあと、「和歌の作者名を載せなかつたのは片手落ちだ」と、それとなく難じております。「俊成卿忠度の歌をよみ人知らずとて、千載集に入られたりし事を心つき事におぼして」と、その子藤原定家の事跡にことよせておりますが、愚案するに、古今和歌集における菅原道真の取り扱い（本シリーズ第4回参照）を見ても、俊成のやり方は公平を欠いているともうせましよう。ただ、『平家物語』の忠度都落ちの興趣についていえば、作者名を「平忠度朝臣」と明示すると、「読人しらず」にくらべて、ずっと余情がなくなりま

焼き芋と数珠

町名看板②の建物の隣は駐車場なので、写真をとっていると松原通の様子が目に入ります。そこになんと、焼き芋屋 林商店（松原通寺町西入ル石不動之町）を見つけました。寺町松原郵便局の裏隣。目印は、大きな釜です。創業は一八八七年（明治二十年）。京都で二二〇年間、焼き芋一筋。



焼き芋屋 林商店

町名の石不動之町は、本シリーズ第1回にも出てきました。明王院不動寺（石不動）にちなむ町名で、そのとき「之」を入れるかどうかの思考をいたしました。今回歩き回っているのは、その



御幸町通 松原上ル 石不動町 ③

東の地域に当たります。同じ町名の看板が、御幸町通にもあります。「御幸町通松原上ル石不動町」③です。石不動之町が、基準の十字路を松原御幸町として、松原通沿いに麩屋町通から寺町通に至る広い両側町であることがわかります。

寺院の多い京都ならではの商売といえば、数珠屋。中野伊助商店（寺町通松原上ル京極町）は、創業明和元年（一七六四年）の数珠の老舗。宗派によって形式が異なる数珠を手作り。②の京極町の町内に店舗があります。甘党のわたしには、「幸福堂」（河原町通松原上ル幸竹町）。明治元年（一八六八年）創業。名物は、五条大橋の擬宝珠に見立てた「ごじょうぎぼし最中」。

松原橋

松原通は、平安京の五条大路に当たります。豊臣秀吉が天正十八年（一五九〇年）に現在の位置（六条坊門小路）に五条大橋を架け替えるまでは、旧の五条橋は松原通にかかっていました。本シリーズ第3回でも、義経（牛若丸）が弁慶と果し合いをしたという五条橋は、今の松原橋の位置に架っていたと説明しました。

義経・弁慶伝説と同じ平安時代末期に編纂された『梁塵秘抄』〔後白河院撰述、一一八〇頃成立。』梁塵秘抄・閑吟集・狂言歌謡、小林芳規他校注、新日本古典文学大系五六、岩波書店、一九九三〕は、当時「今様」とよばれた歌謡を集めた歌集です。その巻第二・三・四に、次の歌謡が載っています。

何れか清水へ参る道、

京極くだりに五条まで

石橋よ、

東の橋詰四つ棟六波羅堂、

愛宕寺大仏深井とか、

それを打ち過ぎて八坂寺、(後略)

この歌謡の中には、五条橋が「石橋」として読み込まれています。梁塵秘抄の歌謡が歌われた平安時代末期には、石橋だったのでしょうか。すると、義経(牛若丸)が橋の欄干に飛び上がった情景も、木造の橋だと思いついていたイメージと随分変わったものになりますね。

シリーズ第1回に『上杉本洛中洛外図屏風』の一部分を載せました(図1・1)が、その中に当時(一五五〇年ごろ)の五条橋の様子が描かれていたのを思い出してください。鴨川に中洲があつて、五条橋が二つに分かれていました。別の洛中洛外図屏風として、重要文化財『歴博甲本洛中洛外図屏風』(一五二五年)の画像データが国立歴史民俗博物館のホームページから閲覧できます。

<http://www.rekihaku.ac.jp/gallery/rakutyuu/theme/>

この画像には、当時の五条橋の中州の様子が描かれており、陰陽道の安倍晴明を祀った晴明塚と晴明が建立したと伝わる法城寺が描かれています。この寺名の「法城」は、「水を去り、土に成る」に由来し、安倍晴明が呪法で治水をおこなったという伝説にちなんでいます。



松原橋から比叡山を望む

写真は、現在の松原橋。鴨川の上流に向かって、比叡山を遠望したものです。中州は跡形もありません。

天明の大火

寺町通高辻上ル恵美須之町には、浄土宗の永養寺があります。永養寺といえは、京都を焼き尽くした「天明の大火」(一七八八年、天明八年)。鴨川の東、団栗(どんぐり)の家の民家から出火。折からの強風にあおられて、鴨川西岸の永養寺に飛び火し、南北に拡大しました。一月三十日、二月一日、二日と三日間にわたって燃え続けたといえます。その焼失範囲は当時の京都の市街地のほとんどで、応仁の乱以来の災害でした。中心部の御所、二条城本丸をはじめとして、東北の相国寺、西北は西陣の大部分(浄福寺、本隆寺は類焼せず)、西南は本園寺が類焼(西本願寺は類焼せず)。東南の下寺町近辺の寺々も類焼しました。

「天明の大火」だけで永養寺(寺町高辻上ル)をもちだすのは、失礼なので、すこしだけ補足。本シリーズ第4回で、永養寺町の由来について説明し、天正の地割のときに、永養寺町から現在地へ移転してきたと述べました。嘉永の大火(一八五〇年)(本シリーズ第1回参照)でも焼けたらしい(『京都坊目誌』)。境内に、明治八年建設の開智小学校の講堂が移築されているそうです。調査当日は見落として、写真を撮り損ねてしまいました。

高辻通を東へ、河原町高辻の交差点をわたったところに、町名看板「河原町通高辻上ル天満町」④が貼ってあります。このあたりの河原町は、鴨川の流路に合わせるように斜行しています。



河原町通 高辻上ル 天満町 ④

高瀬川

高瀬川にかかる高辻橋を渡ると、木屋町通に突き当たります。木屋町通は高瀬川に沿って、このあたりは、下木屋町ともいいます。高辻通が突き当たりから南方面は、木屋町通の東側に古くからの旅館が並んでいます。高辻通の丁字路より北は、料理屋が主。いわゆる繁華街ではなく、四条木屋町近辺の雑踏からは想像できないくらいに静かです。店に入ると、多くは鴨川が見えるように客室がしつらえあり、夏には納涼のための床(ゆか)が出ます。

高瀬川の西側には、道路はなく、びっしりと町家が立ち並んでいます。高瀬川に面したところどころに、広い窓をとってある家は、たいていは料理屋などの店舗。高瀬川沿いは、桜と柳の混在した並木になっていますので、春の桜、夏には新緑をみながら、食事するのは楽しいものです。これらの店に入るのは、西木屋町通から。西木屋松原から南に少し歩くと、町名看板「西木屋町通松原下ル難波町」⑤があります。ここでは、町名を「なんばちよう」としましたが、『京都市の地名』では、「なにわちよう」

と記されています。



西木屋町通 松原下ル 難波町 ⑤

西木屋町通の細い通りをさらに南にゆくと、今回の最初に出てきた生活道路、万寿寺橋の西詰に出ます。西木屋町通は、ここでいったん途切れて、五条通の南で復活します。この先は、別の回で紹介することにしませう。

京扇子の発祥の地

河原町通は、四条より南は斜めに走っていて、南北の通りを遠慮会釈なしに寸断してゆきます。とくに寺町通は、今回の出発点の寺町万寿寺で、河原町通によって分断されています。切れた^{とかけ}蜷蛸の尻尾よろしく、万寿寺河原町(同時に万寿寺寺町)から南にも、寺町通が続いています。

寺町五条のあたりは、京扇子の発祥の地。いまはありませんが、かつては、扇子の製造販売で有名な時宗の寺、新善光寺御影堂があったところです。このあたりの町名に「御影堂前町」、五条通の南に「御影堂町」が残っているのはその名残です。



『拾遺都名所図会』巻之一 御影堂扇折の図。
(国際日本文化センター「平安京都名所図会データベース」より引用)

お寺がなぜ、扇子を商っていたか。平敦盛の室・蓮華院尼が御影堂に閑居後、寺僧とともに「阿古女扇」を製作しはじめたと伝えられています。『拾遺都名所図会』には、御影堂扇折の図が載せられており、女性が分業で扇子を作り、僧が武士を相手に商っている様子が示されています。引用した挿絵から、往時の様子が彷彿としてきます。この挿絵の賛。

御影堂扇折

斑竹

扇折る 手品やさしく御影堂
涼しき風を箱入にして

この挿絵の中で扇を折っている女性は、こころなしか垢抜けしており、右端の女性は振袖を着ておりますが、これでは能率のよい作業ができるとはおもわれませんね。挿絵画家の読者に対するサービスか、あるいは、事実とすれば、営業用の実演でしょう。冷やかしの客らしいのが、ポカンと女性にみほれている様子も描かれています。

本シリーズ第6回にでてきた『洛中風俗図屏風(舟木本)』(東京国立博物館蔵重要文化財)の右隻左には、大きく五条橋(これは現在の五条大橋の位置に架っている)が描かれています。六条三筋町を含むのと同じ部分図に、六条三筋町の右上に雲を隔て、五条寺町のあたりの往來の様子が描かれています。念のため、アドレスを再掲します。

http://www.tnm.jp/jp/servelet/Con?pageId=E16&processId=00&colId=A11168&img_id=C0021445

描かれた雲は、場所が離れていることを示すための省略記号です。そこは、五条橋の西詰から続いて、五条橋通から寺町通りへ曲がる四辻の北側。往來には、天秤棒の両端に薪らしき荷を担いだ商人、荷を背にした牛馬、沿道の店など。その中に、両替屋の隣に扇屋が描かれています。女性が二人、扇子を作っており、隣の店から男がその様子を覗いているところが描かれています。

『舟木本洛中風俗図』が描かれたのが、一六〇〇年ごろ。『拾遺都名所図会』の発刊が、一七八七年(天明七年)(天明の大火の前年)ですから、約百八十年たっても、男がすることは同じとみえます。覗いている男たちは独身にちがいがなく、彼らの身になって推し量りますと、扇屋には美人が多かったにちがいない。そういえば、今回の冒頭にでてきた落語『口入屋』のなかで別嬪の産地とされた「寺町万寿寺」はすぐ近くです。深読みすれば、「別嬪」扇屋「五条橋西詰(寺町五条、寺町万寿寺)」の図式が流布していたのかもしれない。この図式を落語『口入屋』の作者も先刻ご存じだった、というのはいかにも見てきたよつな与太。

御影堂で作った扇は、御影堂扇のブランドで、近世にいたるまで、京土産として珍重されました。この界限には、扇製造の職人が集まり、扇の一大産地となりました。それを記念して、「扇塚」が五条大橋西詰北側(公衆便所南側の植込みの中)に建てられています。そこは、偶然にも、『舟木本洛中風俗図』が描かれた扇屋の位置に近い場所です。

この近辺の扇屋は、「高橋扇子店」(寺町五条上ル西橋詰町)。寛政年間(一七九〇年頃)の創業。扇子の製造販売と体験教室。ついでに、筆者が学生のころ、「画材を購入した「画箋堂」(河原町

扇塚（京扇子発祥記念碑）



五条上ル東側）もこの近所です。

プロフィール

藤田眞作（ふじたしんさく）。一九四四年（昭和十九年）北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フイルム（株）足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかたわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所（<http://xyntex.com>）を主宰。



